

晩成社関係図書目録

A Catalogue of Books related to Bansei-Sya

千葉 章仁*
Akihito CHIBA

凡 例

- 一 この目録は帯広・十勝の農業開拓の嚆矢となった晩成社と、その関係者についての刊行図書類を発行年順に列記したものである。
ただし、関係出版物等のすべてを網羅するものではない。
- 二 記述はおおむね次の要領によった。
No. 書名 編・著者名 ※(複製)
発行所・刊行日 判型・頁, (晩成社関連所載の頁), その他
〔分野〕『晩成社関連記述の標題』(執筆者名)。刊行物, および記述内容の簡単な紹介。
※は帯広百年記念館所蔵図書, (複製) 欄は所蔵物がコピー等複製であることを示し, (復刻版) の場合もある。〔分野〕は閲覧・利用等の便宜上, 恣意的に分類したものである。
- 三 市町村史・部落史は, 帯広市史のほか芽室町史・音更町史など一部の記載にとどめ, 執筆者が明確なときは編纂名を略し, 著者名とした。
- 四 未見・未詳の図書にあっても, 実際に刊行されていて重要なものは記載した。
- 五 刊行年はM (明治), T (大正), S (昭和), H (平成) と略記した。

1 北海紀行 依田勉三 ※(複製)

晩成社・M 16・4月刊(?) 菊判・84p, 緒言 2p, 地図 1葉

〔紀行〕明治14年, 北地開拓の可能性をみずから知るべく依田勉三が単身で北海道に渡り, 8月から10月まで函館, 胆振, 根室, 釧路, 十勝, 札幌などの風土, 開拓状況などを見聞きした記録。奥付の記載なく, 緒言の日付から刊行日などを推定した。

2 北海道殖民状況報文 十勝国 河野常吉 ※(複製)

北海道庁殖民部拓殖課・M 34・6・6刊

B 5判・235p (40, 49, 52, 94, 96, 199, 205~207, 218, 226~227, 229p)

〔地誌〕明治29年から道庁嘱託の河野常吉が担当して調査した殖民地の報告書。晩成社と依田勉三, 鈴木銃太郎, 渡辺勝らに関する記述がある。

3 殖民公報・第9号 北海道庁殖民部編 ※(復刻版)

北海道協会・M 35・7月刊 B 5判・111p (77~82p)

〔評伝〕『依田勉三履歴』。殖民公報は創刊号から伊達邦成など開拓に功績のあったものの史伝を掲載し, 勉三をその8人目として紹介する。筆者は河野常吉と思われる。

4 十勝史 酒井庄(章)太郎編 ※

酒井章太郎・M 40・12・15刊 B 6判・374p (116~117, 127~134, 341~342)

〔沿革〕奥付に記載はないが、著者は安田厳城（福本日南の実弟）といわれる。明治38年の晩成社概要、31年大洪水時の鈴木銃太郎らの措置を記述。

5 殖民公報・第95号 北海道庁拓殖部編 ※（復刻版）

北海道協会・T 6・3・31刊 B 5判・130p (57p)

〔評伝〕『本道に於ける褒賞飾版受領者依田勉三』。北海道における飾版下賜の嚆矢であるとして、その事績と「日本帝国褒章之記」を掲載する。

6 十勝開拓の人柱 依田勉三翁の偉業 萩原實 ※（複製）

東部北海道三田会・S 9・9・20刊 B 6判・36p, 写真4葉

〔評伝〕勉三の略伝のほか系譜、移住の動機、開拓創業への苦心などを記述。札幌県令などに宛てた道路開墾願、野火取締の哀願書、晩成合資会社経歴演述書を掲載する。慶應義塾の小泉信三塾長の来帯に合わせて、晩成社創業の苦難と開拓の経緯を紹介した冊子。

7 研農 第4巻第3号 山花豊編

庁立十勝農業学校研農会・S 12・3・1刊 A 5判・32p (10~31)

〔史伝〕『十勝開拓之先駆者 依田勉三、渡邊勝、鈴木銃太郎の事跡』（鈴木隆平）。晩成社3幹部の出会いから、事業なかばでそれぞれの道をあゆみながらも、先駆者としてその目的を果たした事績をたどる。文中に道会議員遠山房吉による“晩成社の起源”に関する記述がある。

8 十勝開発史 萩原実編

発行所不祥・S 12年刊(?) 体裁ほか未詳

〔日誌〕未見のため発行所など未詳。昭和49年復刻版（名著出版）の「むすび」に、昭和12年11月10日の日付があり、刊行は同年12月と思われる。その内容等については、No.54復刻版の項に記載。

9 北海道農会報 第38巻3月号 北海道農会

北海道農会・S 13・3・10刊 A 5判・21p (12~21)

〔談話〕『晩成社後聞記—渡辺カネ談』（若林功）。昭和12年8月下旬、オベリベリの住宅を訪ねた筆者に、口ずから語ったというカネの“昔語り”。移住までの経緯、開墾と耕夫らとの苦勞、晩成社解散後の十勝について聞書きする。後の評伝や著述、物語などにある多くの逸話は、この時の昔語りのもとになっている。

10 開拓の人柱 依田勉三翁を語る 中島武市 ※（複製）

中島武市・S 14・6・23刊 B 6判・16p, 序文ほか12p・写真7葉

〔評伝〕昭和13年7月30日に、著者が帯広放送局から放送した内容と、勉三の略伝などを掲載する。計画されながら立ち消えとなった勉三の銅像を、著者が独力で建立することを決意して刊行した小冊子。

- 11 北海道農業開拓秘録 若林功
(財)八紘學院・S 16・1・15刊 B 6判・414p (153~171)
(史伝・談話)『晩成社の依田勉三』『晩成社後聞記―渡邊カネ』。著者はもと北海道農会技師であり、各地で収録した開拓創業者らの聞き書き等を農会機関誌に発表した。カネの後聞記はNo.9「北海道農会報」に所載のもの。
- 12 依田翁と中島氏の偉業 萩原實編 ※(複製)
依田勉三翁記念会・S 16・6・15刊 A 5判・22p, 序文ほか7p, 写真8葉
〔評伝〕勉三翁銅像除幕式(昭和16年6月22日)の記念として発行。No.10「開拓の人柱」所載の放送原稿のほか、中島武市略歴、勉三の養嗣子依田八百の稿も掲載する。
- 13 日本評論 昭和16年12月号 神敬尚編集
日本評論社・S 16・12・1刊 A 5判・288p (268~286)
〔小説〕『十勝(とがち)』(岡田三郎)。著者は松前町生まれの作家。『十勝』は依田勉三の北海道踏査をテーマにした作品。船で根室に上陸した勉三が、別海、白糠をへて大津に入り、十勝の国を入植の地と心に決めるまでの心境などを、No.1「北海紀行」をもとにして描く。
- 14 北辺・開拓・アイヌ 高倉新一郎
竹村書房・S 17・7・31刊 B 6判・272p (200~214)
〔随筆〕『鈴木親長』『依田勉三翁の銅像』。著者が昭和10年前後に発表した随筆、紀行、小論など22編を収める。偶然古本の中から見つけたという、鈴木親長の“北海道団結殖民法”と題する音更原野開墾計画書を紹介する。同著の全文が活字化されたことはない。また、依田勉三が率いた晩成社の苦闘と事業について記述、ほかに大津のチャシを訪ねる紀行文など。
- 15 帯広市史稿1 帯広市史編纂委員 ※
帯広市・S 18・3・30刊 B 5判・143p (72~80, 109~111)
〔市町村史〕帯広初の市史で、“晩成社移民団体の入地”“晩成社とアイヌの保護”“晩成社の奮闘苦節”“晩成社及宗教”などの記述がある。
- 16 帯広市史稿3 帯広市史編纂委員 ※
帯広市・S 18・3・30刊 B 5判・276p (164~171, 178~189)
〔市町村史〕“十勝国牧畜の来歴”“畜牛”などに晩成社の記述がある。
- 17 帯広市史稿5 帯広市史編纂委員 ※
帯広市・S 18・3・30刊 B 5判・175p (8~12, 27~42)
〔市町村史〕“移民の活動晩成社其の他の活動”“帯広開拓先駆者及女戦士”の項があり、依田、鈴木、渡辺の3幹部と渡辺カネを紹介する。

18 北の巨人 依田勉三 柿本良平 ※(複製)

越後屋書房・S 18・6・20刊 B 6判・242p

〔小説〕依田勉三の苦難にみちた生涯を、青少年の読物として書いたものだが、「序」に“物語ではあるが一行の作り話もない。すべて日誌に記されたものとか、晩成社員と遺族から直接聞いたことばかりを書いた”と記している。No.8「十勝開発史」、鈴木銃太郎と渡辺勝の日記、No.11「北海道農業開拓秘録」などを参考資料としている。

この著者による小説「十勝の春」(越後屋書房・S 17・11・15刊)では、主人公が経営する満州移民実習場に、十勝開発の人柱となった晩成社の開拓精神にちなんで“晩成塾”の名が付けられ、鈴木銃太郎の日記の引用などがある。

19 郷土と開拓 高倉新一郎

柏葉書院・S 22・5・15刊 B 6判・174p (96~122)

〔随筆〕『開拓と女性』『十勝川』。著者が戦前から戦後にかけて諸雑誌等に発表した、開拓とアイヌに関する随筆などを収める。開拓者の妻としての渡辺カネと依田リク、また晩成社の入地と十勝農業の発展について記述する。

20 開拓の父 依田勉三 原田太朗

玄文社・S 22・10・1刊 B 6判・104p

〔児童読物〕静岡県に生まれた依田勉三が、ケプロン報文などを読んで十勝の開拓に入り、イナゴ(トノサマバッタ)や蚊の害にあいながらも、厳しい自然にたくましく挑み続けた姿を描く。著者はとうじ帯広に在住していた。

21 十勝川流域 岡田三郎

白都書房・S 22・10・15刊 B 6判・152p (4~77)

〔小説〕No.13「十勝」に加筆、改題して刊行した。「十勝」では明治14年の依田勉三単独の踏査を描いたが、それにつづく翌年、鈴木銃太郎と共に来道、帯広を入植の地と決めて下付の願いを出すまでを、新たに書き起こした。ほかに著者の代表作「煙」を収める。

22 吼える大地 原田太朗

新日本文化協会・S 22・10・20刊 B 6判・204p

〔小説〕晩成社をモチーフに、入地と開拓から、アイヌとの交流や葛藤など、未開の原野のできごとを、闊達に描く。鈴木銃太郎を中心に据えてフィクションを展開しており、“晩成社外伝”的なところがある。

23 豆陽 七十年記念号 記念出版係編 ※(複製)

下田第一高等学校・S 23・10・1刊 B 5判・78p (5~6, 44~58)

〔記念誌〕『学校沿革史』『創立者依田佐二平翁略伝』。同校の教諭を務めた渡辺勝の勤務年数と俸給、勉三の兄依田佐二平の略伝、十勝開拓のいきさつなどを記述するが、一部に過誤(?)がある。

- 24 北海道開拓秘録 第1篇 若林功
 (財)月寒學院・S 24・4・20刊 B 6判・417p (151~169)
 [史伝・談話]『晩成社の依田勉三』『晩成社後聞記―渡邊カネ』。No.11「北海道農業開拓秘録」の改題・再刊本。ただし、元版に付されていた顔写真を削除してる。
- 25 農聖 依田翁の琴 中島武市 ※(複製)
 中島武市・S 26・6・20刊 B 6判・12p, 序, 依田家系譜, 写真2葉
 [評伝]勉三の銅像は戦時中の昭和18年12月, 金属回収によって撤去されたままになっていたが, 25年8月に再建期成会が発足し, 26年7月1日に再建除幕式が行われた。
- 26 帯広の生い立ち 帯広市史編纂委員会 ※
 帯広市・S 27・9・30刊 A 5判・269p (48~70)
 [市町村史]高倉新一郎の執筆。「開拓の第一歩」「先駆者の入地」を記述のほか, 明治15年夏に鈴木銃太郎が渡辺勝に宛てた書簡, 英国人ランドーによる渡辺勝の住居油彩画を収録する。
- 27 芽室町五十年史 井浦徹人 ※
 芽室町役場・S 27・12・25刊 A 5判・716p (59~65, 637~643ほか)
 [市町村史]芽室の開祖は晩成社の鈴木銃太郎, 高橋利八, 渡辺勝の三人。その黎明期と銃太郎, 勝の横顔などを紹介する。
- 28 蝦夷詩歌順禮 広瀬龍一 ※
 広瀬龍一・S 28・10・15刊 B 6判・135p (69~74)
 [詩歌]『晩成社耕餘吟』。著者はもと帯広小学校教諭。渡辺カネが児童を前に開拓期の講演(No.140「帯広百年記念館紀要」参照)をしたあと, 求めに応じて和歌を書いたことから, 晩成社幹部が開拓草創期の夜間や風雪時などの余暇に, 漢詩や和歌などを詠んだでいたことを紹介する。
- 29 郭公の里 十勝風土記 原田太朗・帯広放送局編
 十勝教育研究所・S 30・3・10刊 A 5判・508p (40~82, 461~479)
 [物語]『晩成社抄』『依田勉三』『渡辺カネ』。昭和26年4月から3年間, 帯広放送局は十勝開拓の歴史と口碑伝説にまつわる物語を, “郭公の里”という番組で放送した。収録した24話のほとんどを原田が執筆しており, 巧みにフィクションをまじえながら史実を紹介する。
- 30 日本農人傳 卷4 和田傳
 家の光協会・S 30・6・30刊 B 6判・423p (201~244)
 [史伝]『十勝の女王蜂 渡辺カネ』『十勝の人柱 依田勉三』。農人傳は全5巻で, 農業の発展に奮励, 功績を残した102人を紹介している。著者はみづから鋤をとる作家であり, 先人に寄せる温かい目をもって勉三とカネの生きざまを紹介している。

- 31 灯(ともしび)をかかげて 荒野をひらいた人々 和田傳
ポプラ社・S 31・7・25刊 A 5判・192p (49~69, 口絵1葉)
〔児童読物〕『はにうの宿-渡辺カネの話』。著者が先に著した『日本農人傳』を児童向けにしたもの。一部の省略と表現・表記の違いがあるほかは、No.30「日本農人傳」所載の“十勝の女王蜂”をそっくりなぞる。
- 32 愛郷草子 吉田巖 ※
帯広市教育委員会・S 33・11・3刊 B 5判・72p (1~13, 16)
〔談話〕帯広市社会教育叢書第4巻。『とかちのあけぼの紙上録音』。昭和14~16年にかけて、筆者が古老、先覚を訪ねて聞き取った明治期の貴重な証言を収める。晩成社にゆかりが深い野村直二、村田三五郎、大村壬作ら6人が依田勉三の人となりなどを語っている。
- 33 帯広市史 帯広市史編纂委員会編 ※
帯広市・S 35・3・31刊 A 4判・830P (497, 685, 734, 769~821)
〔市町村史〕小林正雄の執筆。通史および関連分野に晩成社の記述を挿入するほか、巻末に「晩成社」の項を立て、その成立から入地、開墾・営農の苦闘、分裂、途別水田の開発、設立50年目の解散までを記述する。
- 34 風土記日本6 北海道篇 下中邦彦編, 高倉新一郎・犬飼哲夫監修
平凡社・S 35・12・19刊 B 6判・350p (241~246)
〔史伝〕『晩成社』。古代から昭和にかけての北海道の歴史と開拓、産業の発展に重きをおいて風土・文化の情勢を記す。晩成社の入植初期の十勝の自然と試練を記述。鈴木銃太郎が渡辺勝に宛てた書簡(No.26「帯広の生い立ち」所載)の後半部を掲載する。
- 35 音更町史 久保吉春 ※
音更町史編さん委員会・S 36・11・3刊 A 5判・857p (56~64, 318)
〔市町村史〕明治22年、渡辺勝は“シカリバツ”で6万坪の牧場経営を始めた。『然別開拓の人』として勝とカネについて記述、ほかにカネの父鈴木親長の“河東郡開発計画”(No.14の北海道団結殖民法とは別)を紹介する。
- 36 渡辺勝・カネ日記 小林正雄編 ※
帯広市教育委員会・S 36・12・28刊 B 5判・74p, 写真8葉
〔日記〕帯広市社会教育叢書第7巻。基本的には晩成社三幹部のひとり、渡辺勝の日記。表題はカネの筆跡が混入するため編者が付した。十勝開拓を目前にした明治16年元旦から、帯広入植後5年目の21年まで収録。さらに佐二平が創設した豆陽学校の教師時代に記した「机頭日記」(明治12~15年)を抄録している。解題、晩成社年表を付す。
- 37 渡辺勝・カネ日記 小林正雄編(帯広市社会教育叢書第8巻) ※
帯広市教育委員会・S 37・12・28刊 B 5判・105p, 写真7葉
〔日記〕No.36の続編。6冊分の日記、明治20年5月から29年までを収録する。その中には“土人世話係”“芽室村在務”“胤馬日記”“農事日記”と記されたものがあり、私用と公務、農作業

や馬匹繁殖にかかわる記述、英人画家ランドーの来訪などのできごともある。明治22～29年の晩成社年表を付す。

38 十勝開拓史話 萩原実

道南歴史研究協議会・S 39・2・10刊 B 6判・256p, 写真10葉

〔史伝〕No.8「十勝開発史」の抄録・普及版的な著書。帯広中学校在職時に発表した晩成社関係の著述を主に、依田勉三の北海紀行、日記、書簡、晩成社規則、エピソードなど、晩成社の事業と苦難のあゆみを収録している。ただし、誤植がきわめて多い。

39 北方のパイオニア 蝦名賢造

北海道放送(株)・S 39・5・10刊 B 6判・261p (71～86)

〔評伝〕『依田勉三』。HBCの月刊誌「ネットワーク」の連載を改筆、刊行。“地域開発における人間研究”を自らの研究テーマとする著者が、地域開発の歴史上における依田勉三について、その位置(地位)と評価を考察する。

40 川西村史 小林正雄 ※

帯広市役所・S 39・11・10刊 A 5判・504p (30～43)

〔市町村史〕鈴木銃太郎による“蝗虫報文”を記載し、晩成社が明治26年に上・下売買府の原野50万坪の貸下げを受けて農場を開き、おりから急増していた移住者を小作や耕夫として雇ったことなどを記述する。同時に「大正村史」も発刊されたが、大正13年2月の分村までは同一内容である。

41 北海道開拓秘録 2 若林功

時事通信社・S 39・7・30刊 新書判・203p (7～29)

〔史伝・談話〕『十勝の人柱・依田勉三』『晩成社老女物語』。No.24の改訂版。全3篇からなっていたものを、加納一郎が掲載順などを整理・改定して4巻本とした。目次の標題、配列を変え、表記を一部改定しているが、記載内容に大きな変化はない。本文のカットを坂本直行が描いている。

42 ひらけゆく大地 上 開拓につくした人びと 3 北海道総務部文書課編

理論社・1966 = S 41・3月刊 B 6判・295p (139～172)

〔史伝〕『依田勉三 苦闘五十年の晩成社』『渡辺カネ 十勝開拓者の妻』(小林正雄)。北海道100年記念事業として刊行(非売)したものの普及版。十勝の開拓を企画し、果敢に挑戦した晩成社の指導者依田勉三と、夫を助け、信仰をつらぬいた渡辺カネの生涯を記述する。

43 北海道百年(上)開拓史・三県時代編 北海道新聞社編※

北海道新聞社・S 42・1・20刊 A 5判・312p (269～274)

〔史伝〕『食われた家』『依田勉三の結社移民』。昭和40年8月から週1回、明治以来の歴史を繙いて連載した企画の集大成。晩成社設立から移住、原野開拓、各種事業を興して会社解散までの成否を分析的に記述する。

- 44 たくましい子 6年 北海道道徳資料研究会編
東京法令出版・S 43・3・1刊 A 5判・104p (28~35)
〔児童図書〕『原野に生きる開たくの母―渡辺カネ』。小学校の道徳の読み物として、文部省学習指導要領に準拠して編まれた副読本。困苦に耐えながら子弟の教育をつづけたカネの生き方をつづる。
- 45 大樹町史 棚瀬善一 ※
大樹町役場・S 44・3・30刊 B 5 861p (73~85, 349, 640 など)
〔市町村史〕明治19年、帯広の開墾を中断するように勉三は、当縁村オイカマナイ（現大樹町）で弟文三郎とともに牧場をはじめた。野火に脅かされながら牛馬を飼育、バターや缶詰を製造したことなど、また、道庁に出した“哀願書”“十勝興農意見書”などを掲載する。
- 46 拓聖 依田勉三傳 田所武編著、萩原實監修 ※
拓聖依田勉三傳刊行会・S 44・5・25刊 A 4判・657p, 写真 20 葉
〔資料集〕依田勉三の事績を紹介するため、既刊の図書から関係箇所を抜粋、集成したもの。No.6「依田勉三翁の偉業」、No.8「十勝開発史」、No.33「帯広市史」、No.38「十勝開発史話」等の抜粋を基本に、依田八百による土地処分に関する「真相発表」、棚瀬善一、千葉小太郎らの未発表論考などを収める。
- 47 十勝風土記 ふるさと百年 十勝毎日新聞社編集部
十勝毎日出版社・S 44・7・30刊 B 5判・294p (92~94)
〔史伝〕『一万町歩開墾が目的 開拓の先駆、晩成社』。新聞連載記事を集成したもので、晩成社の歴史・主要な事業への取組みを年代順に記す。巻末に人名索引があり、標題以外の関連事項・記事が検索できる。
- 48 潮 第124号 池田克哉編集
潮出版社・S 45・4・1刊 A 5判・410p (350~361)
〔小説〕『風吹かば吹け、われ依田勉三なり―北の地に闘いの生涯を終えた拓聖』（戸川幸夫）。No.8「十勝開発史」などによって、三餘塾に学んだ勉三が未開の十勝原野に挑み、苦難の道を歩んださまを描く。「潮」45年4月号に“特別読み物”として掲載。
- 49 十勝平野開拓の父 依田勉三 大蔵広之
潮出版社・S 45・6・1刊 A 6文庫判・67p
〔児童読物〕「希望の友6月号」付録。“希望文庫38 ヒューマンシリーズ”と銘打たれ、世界の偉人を対象に紹介していたが、この巻から新たに社会に貢献した人物の紹介に変更した。依田勉三はその最初。
- 50 文芸おとふけ 町民文芸編集委員会
音更町文化協会・S 46・11・3刊 A 5判・104p (1~7)
〔随筆・逸話〕『翁と私―渡辺勝のことども』（山西秋村）。明治40年、然別地区に一家で移転した筆者は、10歳で渡辺勝を知り、勝が没する25歳ころまでその生きざまを見た。勝の奔放な言

動のなかにひそむ優しさと励ましが、成長期の支えであったと、当時の翁をなつかしむ。

51 依田勉三 大蔵宏之

潮出版社・S 46・11・15刊 A 6文庫判・93p

〔児童読物〕No.49「十勝平野開拓の父」に加筆、一部の表記をかえ、児童図書であったものを青少年向けの読み物にしている。

52 少年時代の依田勉三物語 和田徹三

晩成会創立準備委員会・S 47・10・15刊 B 5判・49p

〔児童読物〕新聞連載をもとにする出版。伊豆に生まれた依田勉三の幼少から、青年期にいたるまでを記述する。

53 開拓者 依田勉三 池田得太郎

潮出版社・1972 = S 47・12・15刊 B 6判・278p

〔小説〕依田勉三の結婚から書き起こし、十勝移住後3年目の明治18年まで、史実とされるできごとにフィクションをまじえ、開拓者として自然と闘い、土と人との葛藤に挑む勉三を描く。

54 北海道晩成社 十勝開発史 萩原實編 ※

名著出版・S 49・8・28刊 A 5判・337p, 写真6葉

〔日誌・史料〕No.8「十勝開発史」の復刻版。原本の誤植を訂正、欠字補訂がなされている。晩成社の原史料を解説・編纂したもので、晩成社資料集の基本図書。晩成社の結成と帯広移住までの経緯、明治16年の入地初年から25年までの事歴を、晩成社の事業報告、議事録、勉三の備忘から収録している。『開墾の始めは豚と一つ鍋』の句を詠んだときのエピソードが、序説に記されている（採録は昭和9年）。

55 北海道十勝国移住案内 鈴木親長著・小林正雄編 ※

帯広市教育委員会・S 50・3・20刊 B 5判・75p, 写真3葉

〔史料〕帯広叢書の第19巻。著者は鈴木銃太郎・渡辺カネの父。カネと共に移住し明治23年に帰郷したあと、河東郡全域の開発計画「北海道団結殖民法」（No.14参照）を書いたが、この「十勝国移住案内」はその草稿とみられる。明治21年12月の脱稿で、同年9月晩成社に辞表を提出した銃太郎の校合による。

56 北海道・十勝開拓史話 萩原実

晩成会・S 50・7・15刊 B 6判・304p, 写真8p

〔史伝〕No.38「十勝開拓史話」の翻刻・改訂版。原書にあった「北海紀行」「晩成社規則」を削除し、新たに『勉三翁の人間像を語る』『渡辺勝・カネ夫妻』など10編を追加掲載。さらに昭和16年6月NHK帯広放送局で行なった座談会（萩原、高倉新一郎、渡部市長など）と、戯曲『開墾の始めは豚と一つ鍋』（松本春雄・S 45年静岡県芸術祭入選）を収録している。

57 北海紀行 依田勉三 ※

晩成会（寺田真一会長）・S 50・7・15刊 B 6判・58 p, 図 1 枚

〔紀行〕No.1 による「北海紀行」を平仮名表記に翻刻し、普及版としたもの。原本にある“緒言”の復刻と、養嗣子依田八百による“あとがき”などを付す。

58 十勝開拓史 萩原實編 ※

（株）名著出版・S 50・7・26刊 A 5判・518p, 写真 5 葉, 図 1 点

〔日誌・史料〕No.54「十勝開発史」の続編。依田勉三の「備忘」などによる明治 26 年から 35 年までの、晩成社 10 年間の日誌。総会資料等も明治 26～35 年まで掲載。解説として晩成社の組織・規則、依田勉三の生い立ちから十勝開拓の経過を記している。

59 現代に残る 北海道の百年 読売新聞社北海道支社編

読売新聞社・S 50・8・10刊 B 6判・342p (214～221)

〔紀行〕『晩成社“大いなる遺産”十勝野』。昭和 49 年 7 月から 50 年 5 月まで日曜版に掲載したもので、森一男記者が執筆。文献と子孫や関係者などの“生き証人”，郷土史に明るい人を訪ねながら晩成社のあゆみをたどり、困難に挑んだ意義をかんがえる。

60 帯広市史 帯広市史編纂委員会 ※

帯広市・S 51・3・10刊 B 5判・1015p (11, 95～118, 824～843)

〔市町村史〕棚瀬善一・小林正雄らによる執筆。昭和 35 年版市史の記述をもとに一部を訂正、その後の歩み、史料等を加えている。晩成社の成立から解散までの記述では、土地処分についての依田八百による訂正などを加筆している。また依田勉三の「北海紀行」, 「北海道殖民状況報文十勝国支部」などを資料篇に収めている。

61 焚火の焰一つ鍋 晩成社夜話 渡部哲雄

柏李庵書房・S 51・5・1刊 A 4 樹型本・138p

〔随筆〕依田勉三と隣り合った家で生まれ、抱かれて育った—という著者が、丸成牛乳搾乳所で働いた父や母から聞いた話や、勉三に寄せる思いなどを綴る。

62 西郷頼母近恵の生涯 西郷頼母研究会編 ※

牧野出版・S 52・10・1刊 A 6 文庫判・189 p (76～87)

〔史伝〕西郷頼母は戊辰戦争当時の会津藩軍頭家老。明治 5 年に依田佐二平らが那賀郡江奈村（現静岡県松崎町）に開いた謹申学舎の塾長に迎えられ、勉三はその教えを受けた。依田家とのつながりも深い。

63 明治学院百年史 明治学院百年史委員会編 ※

明治学院・S 52・11・1刊 A 5判・806p (17～18, 41～43, 94～97)

〔学院史〕学院前身の“東京一致神学校”に学んだ鈴木銃太郎、渡辺勝について、さらにワデル、親長、晩成社の開拓事業などについて記述がある。巻末に人名・件名・参考資料の索引を付す。

- 64 下田北高校 100 周年記念写真集 同記念誌編集委員会 ※
記念事業実行委員会・S 54・10・6 刊 B 4 変形判・170p (8~11)
〔写真集〕創立期の写真に依田勉三、渡辺勝、依田佐二平の写真、さらに渡辺勝の名が記された“私学開業願”，移民募集に関する勉三の書簡がある。
- 65 依田勉三の生涯・上 松山善三 ※
(株)潮出版社・S 54・11・15 刊 A 5 判・247p
〔小説〕No.54「北海道晩成社 十勝開発史」などの文献に沿いながら、映画のシナリオをもののように架空のできごと、人物などを登場させて、晩成社の苦難のようすと東の間の喜びを、まるで事実のごとくに活写する。
- 66 依田勉三の生涯・下 松山善三 ※
(株)潮出版社・S 54・12・20 刊 A 5 判・266p
〔小説〕No.65 の続編。開拓の困難にくわえて社員の逃走、アイヌとのいさかいなどを軸に、晩成社の命運をかける当縁牧場の開設までを描く。
- 67 新版 郷土と開拓 高倉新一郎 ※
北海道出版企画センター・S 55・4・15 刊 A 5 判・205p (117~127)
〔随筆〕『開拓と女性』。戦前から戦後にかけて発表した小論・随筆集。No.19 の昭和 22 年版に、それ以降の著作を追加する。渡辺カネ、関アイ（関寛斎夫人）について記した表題作のほか、『十勝川』も収録する。
- 68 百年のあゆみ 豆陽中 下田北高 下田北高百年誌編集委員会 ※
静岡県立下田北高等学校・S 56・2・15 刊 A 5 判・1175p (3~165)
〔学校史〕『依田佐二平と豆陽学校』。勉三が学んだ三餘塾と謹申学舎、豆陽学校のあゆみなどを記述。
- 69 さいはての荒野へ 依田勉三と晩成社の人たち 木暮正夫 ※
PHP 研究所・S 56・6・10 刊 A 5 判・176p
〔児童読物・史伝〕No.8 「十勝開発史」，帯広市史などを参考にノンフィクション形式で著した児童図書。晩成社の結成から十勝入植初年のできごとを中心に記述している。
- 70 続とかち奇談 渡辺洪 ※
辛夷発行所・S 56・5・14 刊 B 6 判・103p (5~65, 75~82, 90)
〔逸話〕No.71 の続編。「晩成社が導入した西洋山葵」「豚にプラオを曳かせる」など、祖母カネのほか父母や叔母から聞いたはなし、晩成社関係文献による挿話など約 20 編を収める。

71 とかち奇談 渡辺洪 ※

辛夷発行所・S 56・7・15 (2版)刊 B 6判・115p (25~45, 50~60, 67, 72)

〔逸話〕著者は渡辺カネの孫。「晩成社入植地点」「英人画家の来訪」など、幼少時に祖母が寝物語に聞かせてくれた晩成社や開拓にまつわる話、勉三の養嗣子依田八百の談話など20話がある。初版はS 54・8・10刊(未見)。

72 畜産十勝の夜明け 晩成社牧場 渡部哲雄 ※

晩成社研究会・1981=S 56・11・23刊 B 5判・119p, 写真15葉

〔史伝〕晩成社市乳牧場で生まれたという著者が、勉三が生花苗に開いた牧場経営などについて言及する。No.8「十勝開発史」などの日誌をもとに当時の交友関係、世情などを交えて、物語ふう記述。

73 帯広の百年 帯広市史編纂委員会

帯広市役所・S 57・7・25刊 B 5判・180p (12~24)

〔市町村史〕『晩成社』。開基百年事業の一つとして刊行、読まれる市史を意識した“帯広通史”の普及版。晩成社のあゆみをコンパクトに記述する。

74 伝記 依田佐二平の生涯 土屋要作編

依田佐二平翁銅像建設期成会・S 57・10・15刊 B 6判・193p (151~159)

〔伝記〕『北海道開拓事業』。依田勉三の兄(晩成社第2代社長)の伝記。依田佐二平は伊豆・静岡県にあって郡長、県会議員、衆議院議員として、また地方産業、教育などの開発・発展に生涯をささげた先覚として敬慕される。晩成社の開拓事業のほか、土屋三餘と佐二平、勉三の若き日を描いた児童劇「ある日の三餘塾」(加藤俊夫・S 48・11・3)を収録する。

75 北の大地に生きる 依田勉三と晩成社の人たち 木暮正夫 ※

PHP研究所・S 57・12・13刊 A 5判・184p

〔児童読物・史伝〕No.69「さいはての荒野へ」の続編。「渡辺勝・カネ日記」「十勝開拓史」などを参考に、当縁村オイカマナイに開いた牧場の推移と、依田勉三をとりまく人びとの開拓初期の苦闘、人間模様を正編同様に記述し、途別水田の成功と晩成社解散までを描く。

76 晩成町内会のあゆみ 記念誌編集委員会 ※

晩成町内会・S 57・12・30刊 B 5判・55p (11~22, 43~51)

〔部落史〕町内会名は、晩成社入植の地であるところから。会員の郷土史研究家・井上寿による執筆で、晩成社の移住前後の帯広のようすを簡潔に記している。また、渡辺勝の孫・渡辺洪をまじえた座談会も掲載する。

77 帯広晩成社前史—その指導者群像 山下重一

「國學院法學」第20巻4号別刷・S 58・3・10刊 B 5判・231~272p

〔研究〕標題にあるように晩成社の3幹部と渡辺カネ、鈴木親長の5人について、出自からそれぞれの出会い、北海道開拓を決心するまでの経緯を考察する。

78 北のパイオニアたち 村瀬章

はる書房・1983 = S 58・7・30刊 B 6判・245p (155~174)

〔史伝〕『十勝開拓小史』。“北海道・十勝の新しい暮らし”という副題があり、現に十勝で活躍している者を紹介する目的で書かれた。遊びや物づくり、事業や文化に十勝特有の価値を見いだす素地は、開拓に入った晩成社や関寛斎などによって培われたとみる。

79 十勝史夜話・上 渡部哲雄 ※

東北北海道新聞社・1983 = S 58・11・15刊 B 5判・104p (66~73)

〔随筆〕『じっくり書かれてよい依田サヨ』。明治28年に依田勉三はリクと離婚し、翌29年馬場サヨと再婚した。以来サヨは30年にわたって連れ添い、中気になった勉三の看病中に没した。サヨの家系や出自、勉三との暮らしや人柄などを記す。

80 北海道十勝国飛蝗発生史 井上寿 ※

井上寿・S 58・12・6刊 B 6判・187p (99~105, 120~127)

〔災害史〕十勝農業史第1編。明治13年から22年にかけて北海道でトノサマバッタが大発生し、大きな農業被害があった。その元凶は十勝で発生したとされ、駆除のため多額の費用と多数の人員がつぎこまれた。被害の調査報告書や駆除にかかわる公文書・日誌、晩成社関係の記録などをもとに考察し、主要な記録を集成している。

81 帯広市史 帯広市史編纂委員会 ※

帯広市・S 59・2・27刊 B 5判・1005p (116~142)

〔市町村史〕昭和51年版市史を基本にその後10年の出来事、新資料などを加えたもの。晩成社関係の記述はごく一部に訂正、削除がある。

82 三餘塾物語 清水眞澄 ※

清水眞澄・S 59・5・18刊 B 6判・321p (179~180, 253~276)

〔史伝〕依田勉三は7~12歳ころまで、三餘塾で国史略、日本外史、算術などを学んだ。師の土屋三餘は勉三の義理の叔父にあたり、江戸で研鑽のあと伊豆に帰って子弟の育成につくした教育家。兄の佐二平、依田善六（園・晩成社初代社長）も学んだ。

83 十勝史夜話・中 渡部哲雄 ※

東北北海道新聞社・1984 = S 59・8・10刊 B 5判・104p (2~8)

〔随筆〕『世に出ぬ勉三翁の老境日記』。晩成社の日誌No.57「十勝開拓史」は明治35年10月14日で終わっている。続編刊行への期待をこめて、勉三晩年の日記の一部などを記述する。日誌の続編はのちにNo.100「十勝拓殖史」として刊行された。

84 呼ぶ声 依田勉三の生涯 上 松山善三

潮出版社・S 59・10・29刊 A 6文庫判・254p

〔小説〕No.65に同じ。

- 85 呼ぶ声 依田勉三の生涯 下 松山善三
潮出版社・S 59・10・29刊 A 6判・270p
〔小説〕No.66に同じ。
- 86 歴史随想 冬の蝶 藤野順
雪華社・S 59・12・25刊 B 6判・216p (129~163)
〔随想〕『十勝開拓の父・依田勉三』。幕末から昭和にかけて歴史の舞台で活躍した人物を紹介した著書。しかし、その主役ではなく、“孤高”ともいえる信念と忍苦をもって生涯を閉じた「脇役」にスポットをあてる。No.46「拓聖 依田勉三伝」、No.73「帯広の百年」、「南豆風土記」(未見)などを参考に記述。
- 87 エゾ地一周ひとり旅 A・S・ランドー, 戸田祐子訳 ※
未来社・1985 = S 60・6・15刊 B 6判・274p (76~112)
〔紀行〕『第8章 十勝地方—純粋なアイヌ—面白い川漁法』。明治23年に約150日間にわたって北海道を旅したイギリス人画家(冒険家)の旅行記を、ほぼ全訳。ランドーは8月中旬、“オビシロ”で渡辺勝とカネに出会い、勝の案内で国見山などを探検した。勝の住居や暮らしぶり、アイヌとの交流などを記しているほか、当時の十勝川流域やアイヌのようすが活写されている。
- 88 北海道農業の歩み ふるさとの詩 下 酒井勉 ※
日本農業新聞北海道支所・S 60・6・20刊 B 6判・479 (146~153, 166~169, 234~237)
〔史伝〕『開拓者の妻』『大型経営の先駆者』『大酒飲みの願い』『勉三とおサヨ』。北海道各市町村の開拓の歴史を書きつづった新聞連載を収録。晩成社の三幹部と渡辺カネ、勉三の後添いサヨについてのエピソードがある。
- 89 鈴木銃太郎日記 田所武編 ※
柏李庵書房・S 60・6月刊(?) B 5判・370p
〔日記〕晩成社の集団移住に先がけ、帯広でひとり越冬した銃太郎の記録をはじめ、耕夫の葛藤、トノサマバッタの襲来、晩成社幹部の辞退、シブサラ入地、美生牧場の開設などの記述がある。明治44年までの詳細な日記の解説。ほかに銃太郎と関わりのあった人々の、その後のあゆみを付記する。奥付に刊行日の記載なし。
- 90 西士狩開拓史 一世紀 西士狩開拓史編集委員会 ※
西士狩開拓百年記念協賛会・S 61・3・31刊 A 5判・305p (39~79)
〔部落史〕『開拓史』。明治19年以降、鈴木銃太郎・高橋利八・渡辺勝が相次いでシブサラ(西士狩)開墾にいどんだ。その後、開拓の基礎がなったことなどを契機に、他に移住するまでを記述する。
- 91 帯広百年記念館紀要 第4号 帯広百年記念館 ※
帯広百年記念館・S 61・3・31刊 B 5判・48p (31~38)
〔資料目録〕『帯広百年記念館晩成社関係資料所蔵目録1』(柄崎恵子)。昭和56年度までに“十勝郷土資料室”に寄贈された関係資料を収録する。生活用品のほか、晩成社の社印、帳簿類、営業報告書、勉三の日誌、書簡類など282点につき、寸法や年代、実物・複写、寄贈者名などを記す。

- 92 ふるさとの語り部 第1号 帯広百年記念館 ※
 帯広百年記念館・S 61・12・15刊 A 5判・214p (1~12)
 [談話]『依田八百』(聞き手・小林正雄, S 42・11・9収録)。依田勉三の養嗣子・八百が、勉三の晩年のようすや、知られざる人柄などについて思い出を語る。
- 93 雄飛への胎動 依田勉三を育てた土壌 石川慎吾 ※
 松崎町教育委員会・S 62・3・20刊 A 5判・123p
 [伝記]「伊豆のあけぼの」と題する青少年向け郷土誌の第1集。生誕から十勝開拓を決意するまで、依田勉三の青少年期の成長過程を、事実と虚構をまじえながら叙述。勉三の開拓者魂を育てた伊豆の風土と指導者たち、困難に立ち向かわせた時代背景などにスポットをあてる。
- 94 北のいぶき 第5号 北海道開発庁総務課編
 北海道開発協会・S 62・4・1刊 A 4変型判・64p (50~56)
 [評伝]『北のパイオニア探訪(5) 依田勉三の挑戦』(浅田英祺)。14戸28人の移住者をもって、道なき十勝内陸の開拓に挑んだ依田勉三と、その一族からなる晩成社。幾多の辛酸をなめながら次々と新たな事業に手を染めた企業人、事業家としての依田勉三について論述する。
- 95 ふるさとの語り部 第2号 帯広百年記念館 ※
 帯広百年記念館・S 62・12・25刊 A 5判・281p (65~78)
 [談話]『稲葉嘉一・佐藤留五郎』(聞き手・棚瀬善一, S 48・8・20収録)。明治末期から晩成社の途別農場で依田勉三とともに、水田耕作や小作小屋づくりなどをした二人が、勤勉であったといわれる勉三の素顔を語る。
- 96 十勝人 北海道新聞社帯広報道部編 ※
 北海道新聞社・S 63・3・24刊 B 6判・309p (126~141)
 [紀行]『晩成社』。新聞に134回にわたって連載した企画記事からなる。“ルーツを探る”と題する松崎町訪問記では、記者が依田勉三の家や佐二平の像、三餘塾資料館などゆかりの人びとを訪ねて、困難な北海道開拓への挑戦者を生んだ伊豆の精神風土をたどる。
- 97 帯広百年記念館紀要 第6号 帯広百年記念館 ※
 帯広百年記念館・S 63・3・31刊 B 5判・44p (35~42)
 [資料目録]『帯広百年記念館晩成社関係資料所蔵目録2』(柄崎恵子・加藤綱)。昭和57年度から63年2月までに収蔵した関係資料261点について、名称・年代・寸法、寄贈・寄託の別などを掲載する。
- 98 トカプチ・創刊号 山内隆一編集 ※
 静窓書房・1989=H 1・3・25刊 B 5判・105p (39~50)
 [研究]『渡辺勝とワッデル』(前田弘)。依田勉三と鈴木銃太郎は渡辺勝を通じて知り合った。その出会いのきっかけになったワッデル塾と勝の関係を「渡辺勝・カネ日記」などをもとに考察し、帯広市史などの誤謬をたどる。

99 並み立つ峰 小林正雄 ※

有田書房・H 1・7・30刊 A 5 横判・234p (57, 65, 74, 76, 90 ほか)

〔随筆〕『依田勉三の生家』『寒い晩春』『晩成社の新資料』『鈴木銃太郎の墓』ほか。15年間執筆した十勝毎日新聞の“編集余録”から225編を収録したエッセイ集で、晩成社に関するものが13編ある。帯広市史、勝・カネ日記などの編者ならでの知られざる話も記す。

100 然別百年 然別地区開拓史 中谷勝則編集 ※

然別地区開拓百年記念事業協賛会・H 1・12・15刊 B 5 判・792p (118~124, 621~628)

〔部落史〕『開拓期』『渡辺勝・カネ夫妻』。音更町然別地区の開祖となった渡辺勝の日記などをもとに、然別入植の経緯・晩成社の経過などを記述。また勝・カネ夫妻の履歴、逸話を収録する。

101 北海道晩成社 十勝拓殖史 萩原實編 ※

萩原實・H 3・1・10刊 B 5・223p, 写真6葉, 遺墨2点

〔日誌・史料〕No.58「十勝開拓史」の続編。依田勉三の「備忘」と晩成社営業報告書、総会決議書などをもとにする、明治36年から大正元年まで11年間の記録。日誌は「備忘10」欠本のため明治35・10~39・12月が欠如。40年から43年まで収録、総会資料などは36年から大正元年まで収録する。

102 新十勝史 十勝郷土研究会新十勝史編集委員会 ※

十勝毎日新聞社・H 3・3・15刊 B 5 判・785p (192~195, ほか)

〔地域史〕先駆者の群像、帯広市の沿革のほか、晩成社との関わりがふかい芽室町、音更町、幕別町、畜産、教育などの部に記述がある。

103 ふるさとの語り部 第7号 帯広百年記念館 ※

帯広百年記念館・H 3・11・1刊 A 5 判・208p (123~143)

〔談話〕『中島武市』（聞き手・棚瀬善一、S 51・2・28収録）。話者は戦前と前後、2回にわたって、依田勉三の銅像を建立した。No.10「開拓の人柱 依田勉三翁を語る」などの著書もあり、銅像建立にまつわる話などを語る。

104 横浜共立学園 120年の歩み 「同」編集委員会 ※

横浜共立学園・1991 = H 3・11・5刊 B 6 判・398p (133~138, 153)

〔学園史〕『明治期の生徒たち』。明治8年春に入学、16年1月に卒業した鈴木（渡辺）カネのほか、同5年から34年に入学し、のち社会で活躍した者を紹介する。また、教員の部にカネの父鈴木親長の名がある。

105 北のいぶき 第25号 北海道開発庁編

北海道開発協会・1992 = H 4・4・1刊 A 4 変型判・p未詳 (57~63)

〔評伝〕『ほっかいどう移民史5』（榎本守恵）。“続・会社組織による開拓移民”として、十勝原野に鋤をおろした晩成社と興復社の、開墾状況と農場経営について論述する。

- 106 帯広百年記念館紀要 第10号 帯広百年記念館 ※
 帯広百年記念館・H4・3・30刊 B5判・44p (25~40)
 [書簡]『晩成社関係書簡の分析例』(土屋正)。帯広百年記念館が所蔵している晩成社関係の書簡59通のうち、2通の解説全文と55通の解説概要を紹介する。書簡の内訳はバター等の取引関係18通、事務連絡22通、裁判関係5通など。明治26年から大正6年にかけて、善吾から伊豆に宛てたもの、勉三が善吾に宛てたものを主とする。
- 107 とかち昔ばなし 創刊号 渡辺洪編
 十勝開拓資料室・H4・5・14刊 A5判・9p
 [郷土雑誌] 渡辺勝の孫渡辺洪が編集・発行人。昭和10年代いらい、各種出版・刊行物によって形成されてきた“晩成社と依田勉三”観と心象、さらにその業績を見直そう—という意図ながら、〈とかち逆さま奇談〉とした記述を、そのまま受けとるには難がある。
- 108 とかち昔ばなし 通巻2号 渡辺洪編
 十勝開拓資料室・H4・6・15刊 A5判・9p (4~7)
 [考察]『岐路に立った明治十九年の晩成社』(井上寿)。明治19年の春、依田勉三は当縁村オйкаマナイに牧場を開いた。開拓の遅延、同志・社員の動揺、離散が激しい時期であったが、そのとき勉三はどう考えて対処したかを考察する。
- 109 大平原の忘れ得ぬ人々3 三宅太郎 ※
 柏李庵書房・H4・9・20刊 B5判・101p (3~40)
 [史伝]『開拓の先駆者 晩成社の人々』。十勝創生叢書3。帯広市史をはじめNo.46「拓聖 依田勉三伝」、No.75「北の大地に生きる」、No.18「北の巨人 依田勉三」、No.53「開拓者 依田勉三」などを参考に記述する。
- 110 拓聖 依田勉三と晩成社の人々 杉本晃章監修, 菅原雅雪・画
 政経情報社・1992=H4年(?)刊 B5判・109p
 [劇画] No.65「依田勉三の生涯」などを参考にした劇画『オベリベリの黎明』は、鈴木銃太郎の越冬、移民入植から3年間の苦闘を描く。第2部としてNo.93「雄飛への胎動」を収録する。発行年月日の記載なし。
- 111 帯広百年記念館紀要 第11号 帯広百年記念館 ※
 帯広百年記念館・H5・3・30刊 B5判・60p (21~31)
 [講演]『帯広百十年のあゆみ』(棚瀬善一)。十勝郷土研究会会長による講演の載録。No.15「帯広市史稿」の編纂にかかわったり、晩成社の調査で松崎町を訪ねたことをもとに、勉三の生い立ちと開拓について語る。
- 112 十勝・ふるさと紀行 風の吹くままに 5 千葉章仁 ※
 帯広信用金庫・H5・4月刊 B6変型豆本・111p (1~21)
 [紀行]『晩成社』。開拓が始まってから100年余、住みよい街、住んでみたい町といわれるようになった帯広の古きを訪ね、晩成社の不屈の挑戦、試練の跡などを紹介する。

113 風雪の群像 上 酒井勉

日本農業新聞北海道支所・H5・8・5刊 B6判・421p(68~75, 124~131, 180~187)

〔史伝〕『依田勉三』『渡辺カネ』『鈴木銃太郎』。北海道の原野を拓き農業の確立に挑んだ開拓者たちの記録。S64年から4年間、208回連載したものに補筆、晩成社の開拓者魂にスポットをあてる。

114 雁と原野と十勝川 小澤啓二 ※

小澤啓二・H5・11・21刊 B5判・105p(39~43)

〔随筆〕『洪水鈴木銃太郎の記録』。十勝川と雁に関する文を収めた著書で、明治31年に発生した大洪水の模様を鈴木銃太郎の書簡などで紹介する。

115 松崎町史資料編第二集 教育編 松崎町史編さん委員会 ※

松崎町教育委員会・H6・3月刊 B5判・355p(11~17, 208~209)

〔市町村史〕『郷学謹申学舎と保科(西郷)頼母』『依田佐二平と私立豆陽学校創立』。依田勉三が学んだ謹申学舎、渡辺勝が教鞭を執った豆陽学校についての文書・文献などを掲載する。

116 ふるさと歴史新聞1 あれ地を田畑に! 笠原秀 ※

ポプラ社・1996=H6・4月刊 A4判・48p(4~7)

〔児童読物〕『十勝平野の開たくと依田勉三』。晩成社の設立から移住、開墾から大豆の栽培、水田の開発などを分かりやすく記述する。“東日本編”13話からなり、北海道では晩成社のみ紹介。

117 トカプチ 第9号 山内隆一編集

静窓書房・1994=H6・10・20刊 B5判・118p(1~49)

〔研究〕『明治16年の晩成社移民団史-オベリベリ開拓苦難の出発』(井上寿)。No.54, No.58, No.38などの日誌・日記などをもとに、勉三の北海道踏査から晩成社の設立、移民団の移住と入植一年目の開拓状況、札幌県庁の対応などについて考察・論証する。

118 ふるさとの語り部 第11号 帯広百年記念館 ※

帯広百年記念館・H7・3・20刊 A5判・140p(25~44, 90~102)

〔談話〕『小出忠農夫』『鈴木正雄』『酒井タツエ』(聞き手・明石博, H5~6年収録)。小出は途別の晩成社農場のこと、酒井は渡辺カネとの思い出などを語る。鈴木正雄は鈴木銃太郎の甥、大正3年に一家で芽室に入植した。幼少時の銃太郎の思い出、渡辺勝・カネについて語る。口絵に晩成社関係の写真10葉を掲載。

119 帯広における開拓初期の気候復元 東海林隆夫 ※

専修大学附属高等学校紀要第16号別刷・1995=H7・3月刊 A5判・52p

〔研究〕No.35・36『渡辺勝・カネ日記』の天候に関する記述をもとに、明治16年から22年まで7年間の帯広の降水・晴天日数、夏期の気温、年間降水量などを推定している。7年間のうち年間降水量が1000mmを超えたのは明治18年だけであり、ほかの年は少雨傾向で農作物の栽培を困難にしたと推定し、移民団の困苦を裏付ける資料でもある。

- 120 帯広百年記念館紀要 第13号 帯広百年記念館 ※
 帯広百年記念館・H7・3・31刊 B5判・59p(1~32)
 [研究]『オバリバリ開拓に尽くした信州藩一士族父子のルーツを探る・キリスト者鈴木親長と銃太郎父子』(柏崎良一)。標題のとおり晩成社の一員として帯広開拓に尽くした鈴木親長・銃太郎について、その出自から、移住・破綻・幹部辞任にいたった経緯などを、キリスト者としての関係を重視して究明する。
- 121 第三文明 1995 10月号 松下壮一編集
 第三文明社・H7・10・2刊 B5判・114p(6~8)
 [史伝]『日本パイオニア探訪 依田勉三』(鳥飼新市)。探訪シリーズの第6回、原野の開拓に挑んだ依田勉三の生涯を簡潔に紹介する。オイカマナイ牧場跡の写真など8葉を添える。
- 122 トカプチ 第11号 山内隆一編集 ※
 静窓書房・1996=H8・9・1刊 A5判・186p(1~112)
 [研究]『日本資本主義と北海道・十勝 その(1)』(飛岡久)。十勝の開拓について論考し、晩成社を結成するにいたった経緯と目的、入植数年にして移民が半減することになった晩成社規則と、その経営について記述する。
- 123 凜として生きる—渡辺カネ・高田姉妹の生涯 加藤重
 加藤重・1996=H8・10・5刊 B6判・215p(1~100)
 [評伝]『凜として生きる—帯広開拓の礎を築いた渡辺カネ』。著者はNo.103「横浜共立学園120年の歩み」編集委員のひとり。学園の歴史をたどるなかで、困難な時代を生き抜いたカネに惹かれて、その生涯を追った。カネについての記述はNo.41「北海道開拓秘録」などがよく知られるが、調査を重ねて本格的な史伝・評伝の執筆に取組み、刊行されたのは本書が初めて。
- 124 ふるさとの語り部 第13号 帯広百年記念館 ※
 帯広百年記念館・H9・3・30刊 A5判・169p(159~165)
 [談話]『浜中千枝』(聞き手・明石博, H7・10・31収録)。話者は渡辺勝・カネの孫。幼児期に音更と帯広で祖母と暮らした思い出や、カネの昔語り、カネの人となり、エピソードなどを話す。
- 125 大樹五十話 わが愛するふるさとの大地よ 大樹教育委員会編 ※
 大樹町・H9・3・30刊 A5判・343p(109~168, 275~278)
 [史伝]『依田勉三の十勝探検』『晩成社当縁牧場』ほか。古老の証言などをもとに、太田善繁が執筆して広報紙に連載した企画の一本化。晩成社関係の記述は各種資料を参考に行っている。
- 126 トカプチ 第12号 「トカプチ」編集部 ※
 十勝文化会議郷土史研究部会・1999=H11・8・1刊 B5判・90p(11~27)
 [研究・書簡]『貸シタル馬ハ……』『ランダー資料舞いこむ』(前田弘)。平成2年12月、渡辺家で一束の書簡類が発見された。明治23年に来訪したイギリス人ランダーと渡辺勝によるもので、書簡の一部を読み解きながら、No.87「エゾ地一周ひとり旅」の誇張や虚構部分をあかし、「勝・カネ日記」に書かれていない交流のようすなどを推察する。

- 127 百二十年のあゆみ 豆陽中学 下田北高 下田北高百二十年記念誌編集委員会 ※
下田北高等学校・H 11・10・1刊 A 4判・167p (16~27)
〔記念誌〕『私立豆陽学校の開校』ほか。No.35「渡辺勝・カネ日記」を一部引用して豆陽学校の創立から県立移行へのエピソードを綴っている。勉三の“留別の詩”，勝の“決意の詩”など掲載。
- 128 目でみる日本人物百科6 産業・技術人物事典 山口昌男監修 ※
日本図書センター・2000 = H 12・3・25刊 A 4判・80p (76)
〔児童書〕『北海道開拓の基礎を築いた依田勉三』。日本の産業と技術の発展に功績を残した人物、101人を紹介している。
- 129 開拓百年 依田のあゆみ 記念誌編集委員会 ※
依田開基百年協賛会・H 12・12・1刊 B 5判・156p (18~48) 写真6葉
〔部落史〕明治29年晩成社が途別の原野75万坪の貸付けをうけ、小作30余戸を入れたのが部落の始まり。その後の水田試作の成功から、地域と晩成社の変遷を年表中心に記している。
- 130 北へ… 異色人物伝 北海道新聞社編
北海道新聞社・2000 = H 12・12・31刊 A 5判・307p (120~125)
〔紀行〕『渡辺カネ 信仰に生き十勝開拓』。平成11年7月から日曜版に連載した人物企画。カネを十勝の開拓に駆りたてることになった要因を、さまざまな角度から検証する。カネ若き日の、評伝ともなっている。
- 131 トカプチ 第13号 トカプチ編集部
十勝文化会議郷土史研究部会・H 13・3・15刊 B 5判・96p (58~66)
〔研究〕『晩成社外伝 渡辺勝の英学修業』（前田弘）。標題のとおり渡辺勝の英学修業について考察する。勝が17歳にして入学した尾張藩立名古屋学校（愛知県立中学）の、英学部の教材や授業内容を手掛かりに記述。帯広移住7年後に、英人ランドーに宛てた英文書簡の草稿を掲載する。
- 132 帯広百年記念館紀要 第19号 帯広百年記念館 ※
帯広百年記念館・H 13・3・31刊 A 4判・92p (43~54)
〔考察〕『晩成社移民団関係写真と写真師・鈴木真一』（作間勝彦）。晩成社移民団が横浜港の出発などにさいして残した写真が、いつ、どこで、どのようにして撮影されたのかを、晩成社関係資料などによって明らかにする。また、勉三の叔父である鈴木真一の出自と経歴、写真史に名を残すにいたった仕事と試みを記述する。
- 133 激動100年の軌跡 十勝20世紀 十勝毎日新聞社編 ※
十勝毎日新聞社・2001 = H 13・8・25刊 A 5判・347p (24~26)
〔評伝〕『晩成社の苦悩』。新聞の連載企画を“真実の十勝百年史”として出版。移民農家の困窮ぶり、幹部のなかに生じた亀裂などを略記する。

- 134 ほかいどう百年物語 S T Vラジオ編
 中西出版・2002 = H 14・2・20刊 B 6判・343p (125~142)
 [史伝]『依田勉三』『渡辺カネ』。ラジオの放送原稿による出版。1週に1回、北海道100年の歴史をきざみ、各地・各界で活躍してきた人々の人生ドラマを紹介。勉三とカネの出自から、伝えられるエピソードまでコンパクトにまとめる。
- 135 トカプチ 第14号 トカプチ編集部
 十勝文化会議郷土史研究部会・H 14・3・15刊 B 5判・98p (13~21)
 [研究]『晩成社外伝 修技学校と渡辺勝』(前田弘)。渡辺勝は20歳のとき名古屋から上京して、電信技術修技学校に入学した。同校における授業内容や、1年後に退学になってしまった経緯などを考察する。
- 136 依田勉三の生涯 松山善三
 「依田勉三の生涯」を復刻する会・H 14・11・1刊 A 5判・458p
 [小説] No.65・66の翻刻・普及版。上下2巻本であったものを、判型を大きくし全18章を一冊に収める。
- 137 ふるさとの語り部 第19号 帯広百年記念館 ※
 帯広百年記念館・H 15・3・30刊 A 5判・219p (179~213)
 [史伝]『父・三原武彦の生涯と依田勉三』(島田ユリ)。依田勉三が病床で口にした“晩成社にはもう何も…。しかし…十勝は”という言葉聞いた三原武彦の次女が、二人の出会いと勉三の晩年のようすなどを、聴いたまま綴る。
- 138 帯広市史 帯広市史編纂委員会 ※
 帯広市・H 15・12・25刊 B 5判・1189p (9~10, 132~162, 517~518, 680~681, 787)
 [市町村史]昭和59年版市史の記述をもとに、概要および通史編(行政)で、晩成社関連記述の一部を改稿、加筆している。経済・産業編などでも一部に加除がある。
- 139 帯広開拓秘話 ひとつ鍋 波村雪穂 ※
 彩図社・H 16・3・15刊 A 5文庫判・376p, 写真8p (20葉)
 [小説]大正9年秋に開かれた途別水田成功の宴の項などを随所にはさみながら、晩成社のあゆみをたどる。史実に沿いながらフィクションをまじえる。
- 140 帯広百年記念館紀要 第22号 帯広百年記念館 ※
 帯広百年記念館・H 16・3・31刊 A 4判・44p (1~13)
 [講演記録]『晩成社の渡辺カネとアイヌの人びと』(広瀬龍太)。昭和9年3月、76歳の渡辺カネが帯広尋常小学校で卒業生に語った“開拓当時の昔話”の筆録をとおして、カネの経歴、アイヌとの出会い・交流などを考察する。講演筆録は当時帯広小学校に勤務していた筆者の父広瀬龍一による。

141 十勝人 心の旅 2 千葉章仁 ※

帯広信用金庫・H 17・4月刊 A 6文庫判・151p (116~137)

〔史伝〕『鈴木銃太郎』。十勝各市町村の開拓期のようすなどを訪ねるシリーズの第2巻。団体移住に先がけて帯広で越冬した銃太郎が、晩成社の経営について建言したが認められず、一耕夫となって芽室（西土狩）にみずからの地を求めて移転したいきさつなどを記述する。

142 風吹け、波たて 第1部・開発編 松本春雄 ※

松本春雄・H 17・7・15刊 A 5判・145p

〔小説〕No.54「北海道晩成社―十勝開発史」などを参考文献として、編年体に記述した小説。小説ながらフィクション部はきわめて少なく、日誌、その他の抄録ともとれる作。生誕から入植10年目、明治25年までを描く。

143 風吹け、波たて 第2部・開拓編 松本春雄 ※

松本春雄・H 17・7・15刊 A 5判・413p

〔小説〕No.142の続編。明治26年から35年まで、勉三50歳までの挑戦を描く。

144 風吹け、波たて 第3部・拓殖編, 第4部・十勝野編 松本春雄 ※

松本春男・H 17・7・15刊 A 5判・289p

〔小説〕No.143の続編。明治36年（勉三51歳）から大正13年（73歳）、病没するまでを描く。